

# マルーラ酒が取り持つ社会関係 ナミビア農村社会 の変容とオヴァンボ女性の酒づくり (特集2 農村 女性の生計戦略)

著者	藤岡 悠一郎
権利	Copyrights 日本貿易振興機構(ジェトロ)アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
雑誌名	アフリカレポート
発行年	2008-03
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2344/00008133">http://hdl.handle.net/2344/00008133</a>

# マルーラ酒が取り持つ社会関係

－ ナミビア農村社会の変容と  
オヴァンボ女性の酒づくり －

藤岡悠一郎

## はじめに

アフリカ農村社会への市場経済の浸透や開発政策の導入などに伴い、現金稼得を目的とした生業活動へのアクセスにおいて、女性が周縁化されている状況が報告されている。その一方で、アフリカ女性の生業活動には、現金収入という物差しでは測れない社会的ネットワークの確保や維持という機能もあり、それが生計の安定と成功を期するための重要な資源であることや、社会保障的機能を果たすことなどが指摘されてきた(杉山[2007])。しかしながら、近年のアフリカ農村社会にみられる土地の私有化や世帯の個別化、世帯間の経済格差の拡大といった社会変容は、世帯間のつながりを希薄化させ、生業活動の現金稼得手段としての側面を強め、社会的ネットワークの確保という機能を不安定化させつつある。

本稿では、ナミビア共和国北部のオヴァンボ社会を対象に、女性によるマルーラ酒づくりと酒の贈与に注目し、農村社会の近年の変容のなかで、

彼女らの活動が社会的ネットワークの確保や維持という点でどのような役割を果たしているのか検討したい。なお、本稿で提示するデータは、主に2005年1～4月、2007年2～4月にかけてU村の30世帯を対象に実施したフィールドワークによって得たものである。

## 1. オヴァンボ女性とマルーラ酒

オヴァンボは、農耕と牧畜を主要な生業とするバントゥ語系の農牧民で、主にナミビア北部からアンゴラ南部に暮らしている。オヴァンボという名称は複数のサブグループの総称である。ナミビアでは九つのサブグループが存在し、そのうちの五つは王を頂点とした小王国を形成していたことが知られている。王は土地とその土地に生育する樹木などの所有権を保持し、住民にその利用権を分配する役割を担っていたが、1920年から始まる南アフリカによる統治期に王国組織は解体され、シニア・ヘッドマンとヘッドマンを中心とす

る地方行政システムが新たに導入された。新システムはこれまでの王国組織を原型としたものであり、村の土地や樹木はヘッドマンによって以前とほぼ同様に管理され、住民にはその利用権のみが与えられた。しかし、1990年前後のナミビアの独立移行期から、土地や樹木の私有化がすすめるなど世帯の権限が強まっており、世帯と伝統的権威との関係が変わりつつある。

オヴァンボの人々にとって、2月から4月は特別な季節である。雨季にあたるこの時期は、マルーラの木(学名: *Sclerocarya birrea*)の果実が結実するため、オヴァンボの言葉で「マルーラの季節(ethimbo lyomagongo)」と呼ばれる。女性たちは数人で集まってマルーラの実から果汁を搾り、それを発酵させてマルーラ酒(omagongo)をつくる。男性も女性も朝から友人や親戚の家々を訪ね歩いて酒を飲み、また世帯間で酒を贈与し合う、待ちに待った季節である。

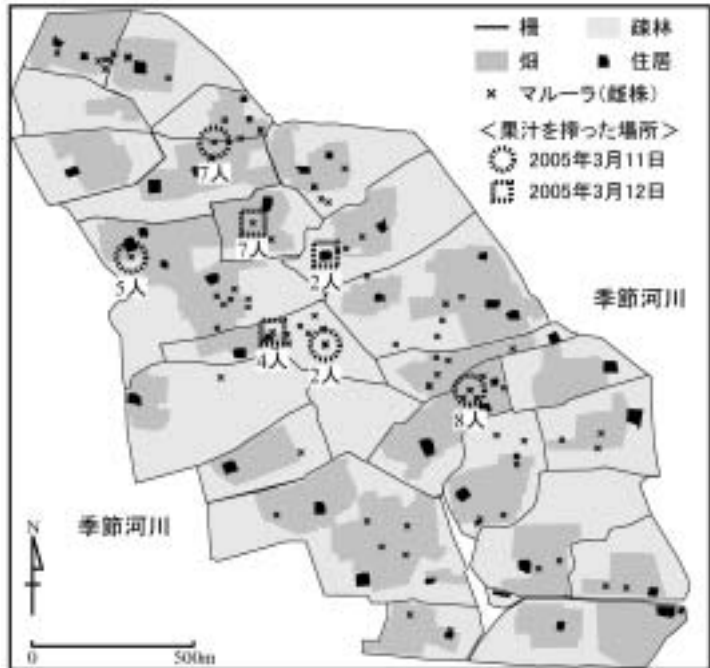
オヴァンボがつくる酒はマルーラ酒だけではない。農牧民である彼らは畑でとれたモロコシを原料とした醸造酒(omalovu)などもつくっている。しかし、彼らにとってマルーラ酒は特別なものであるという意識が強い。それは、味に対する高い評価のみならず、特定の季節にしか飲めないということとも関連するものと思われる。

また、マルーラ酒はかつて王への貢納物であったという点でも他の酒とは異なる性格を有している。オヴァンボの女性は利

用権が与えられたマルーラの木の実を搾って酒をつくり、その酒の一部を王あるいはシニア・ヘッドマンに貢納する義務があった。それは厳格なものであり、貢納や酒づくりを怠ると罰を与えられたともいう。しかし、近年ではヘッドマンなどによるマルーラの厳しい管理はなくなり、酒をシニア・ヘッドマンあるいはヘッドマンに貢納する人も少なくなっている。その一方で、マルーラ酒が世帯間でより頻りに贈与されるようになった。

マルーラ酒が他の酒と異なる点は、他の酒が世帯ごとにつくられるのに対して、マルーラ酒は複数世帯の女性によって共同でつくられるという点にもみてとれる。オヴァンボの社会では生業にお

図 U村におけるマルーラ(雌株)の分布と果汁を搾った場所および人数



(注) 土地利用と樹木の位置は、2004年の現地調査の際にGPSを用いて記録した。また、果汁を搾った場所と人数は2005年の現地観察において把握した。

(出所) 筆者作成。



マルーラの果汁を搾る女性たち（筆者撮影）

ける性別分業がはっきりしており、牧畜や畑の耕起などが男性の仕事である一方、畑の除草や酒づくりなどは女性の仕事とされる。現在、女性の仕事の大部分は世帯が労働の単位となっている。しかし、マルーラ酒づくりでは複数世帯の女性によって共同労働がなされるのである。以下で酒づくりの手順を見てみよう。

まず、(1)果実が熟してくるとその木を保有する世帯の女性が果実をマウンド状に1カ所に集める（現在、樹木はその土地の保有者に属する）。(2)果実を集めた後、木の保有世帯の女性は他の数世帯の女性に日を指定して手伝いを依頼する。(3)その日になると木の保有世帯の女性と手伝いの女性がマウンドの横に集まりその場で果汁を搾る。女性たちは村の中で数カ所に分かれて果汁を搾り、場所を毎日移動する（図参照）。酒を一緒につくるメンバーは固定されたものではなく日によって入れ替わる。女性たちはその場で搾ったばかりの若干発酵した果汁を飲みつつ、村人のうわさ話など

に花を咲かせる。そして、(4)酒づくりを手伝ってもらった女性は、お返しに手伝ってくれた女性の酒づくりを後日手伝うのである。

こうして搾られた果汁はすべてその木の保有世帯のものとなり、手伝った女性は搾った果汁を得ることができない。しかし、酒が発酵すると、酒の所有者は手伝ってくれた女性や友人、親戚などを呼び集めてその酒を共飲

し、また他世帯に贈与する。そのため、所有世帯以外の世帯にも酒を飲む機会が提供される。

オヴァンボは、基本的に核家族あるいは拡大家族を単位として同じ住居に居住し、共食集団である世帯を構成する。オヴァンボの村は行政村であり、なおかつ住居間の距離が数百メートルほど離れた散村の形態をとるため、村としてのまとまりが弱い。オヴァンボは同一クランの成員間の結婚を規制するクラン外婚制を伴う母系の相続システムをもつが、婚姻居住方式は夫方居住をとる。そのため、ひとつの村には複数のクラン成員が混住するが、男性は他村出身の女性と結婚するケースが多く、異なる世帯に属する女性間が親族関係にある場合は少ない。そのため、マルーラ酒づくりにおける、世帯を越えた共同労働や緩やかな労働交換は、異なる世帯の女性間の社会関係を維持・創出する重要な機会となっている。マルーラ酒は昔からつくられてきたものであるが、近年では就労機会の有無や男性の牧畜活動の変化の下で、酒づ

くりの過程や酒のもつ意味が変化していると考えられる。

## 2. オヴァンボ社会の変容

近年のオヴァンボ社会にみられるひとつの特徴は、世帯間の経済格差の拡大である。1990年まで続いた南アフリカの統治期には、オヴァンボ男性の大多数が都市部で契約労働者として働いていたが、アパルトヘイトの下で給与は低く抑えられていた。独立後、アパルトヘイトの撤廃とともにオヴァンボの雇用機会が増加し、高収入職に就く人の数も増えている。このような職に就くのは男性が圧倒的に多い。独立後のナミビア憲法では、性別等による差別の撤廃を掲げており、その理念は農村部にも浸透しつつあるが、現実には女性の就労を阻む要素も一部に根強く残る。したがって、農村部では特に男性の就労機会の有無によって世帯間の経済格差が拡大しつつある。

オヴァンボの男性は現金の多くを家畜に投資するため、現金収入の差は家畜の所有頭数の差となって現れている(藤岡[2007])。この地域では、1980年代後半から90年代前半にかけて早魃にみまわれ、大多数の世帯が家畜を失った。その後、十分な収入のある世帯では購入により家畜頭数を増加させ、数十～百頭ほどのウシを所有しているが、収入が十分でない世帯は家畜頭数が少なく、一部の世帯は小家畜すら持っていない。また、このような状況はオヴァンボの伝統的な放牧形態である季節的な移牧にも変化をもたらしている。かつて移牧は複数世帯の男性による共同労働の形態をとっていたが、現在では多くの家畜をもつ一部の富裕世帯のみが行う世帯単位の労働となった。このように、現在では複数の世帯による共同労働の機会は少なく、世帯が個別化する傾向にある。

ところで、オヴァンボの社会には、「首の骨(esipa lyothingo)」と呼ばれる地縁にもとづく相互扶助の関係がある。この言葉には、(1)家畜を屠殺した際には首の部分の肉を近所の世帯に贈与しなければならない、という意味とともに、(2)隣近所の関係は首の骨のようにつながっていないなければならない、という意味が込められている。現在でも、家畜のミルクや屠殺後の肉が隣近所に日常的に贈与される。しかし、近年では家畜をもつ世帯が一部の富裕世帯に限られるようになり、おかずとなるこれらの食材が富裕世帯から非富裕世帯へと一方向的に贈与される傾向にある。本来、「首の骨」の関係は緩やかな互酬性によって支えられていたと考えられるが、こうした状況は関係の不安定化を意味している。しかし、その一方でマルーラ酒に贈答物としての新たな価値づけがなされ、贈答の流れを補完する働きをしているとみられる。

## 3. マルーラ酒の贈与

マルーラ酒は販売されることはほとんどない。しかし、その一方で女性たちは村内あるいは他村の世帯との間で酒を頻繁に贈与する。贈与の際には、女性はコーラの空き瓶などに酒を入れ、2～5リットル単位で贈るが、なかには10～25リットルほどを一度に贈る場合もある。2007年2月10日～3月31日までの間には、U村の30世帯中22世帯の女性が、延べ525回マルーラ酒を贈与した。贈与する際には、女性が相手の家に酒を直接持っていく場合が多いが、相手がある場で返礼を渡すことはめったにない。

マルーラ酒を頻繁に贈与する理由は、ひとつには酒づくりを手伝ってくれた女性へのお礼がある。そしてもうひとつには、肉やミルクなどを他

世帯から贈与されたことに対するお返しという理由が考えられる。それは例えば次の二つの事例から推察される。

U村では、核家族で夫婦が共働きをする場合など、マルーラ酒をつくっていない世帯が3世帯ある。これらの世帯は収入が多く、多数の家畜を所有している。これらの世帯の女性は、マルーラ酒を自分でつくることがなく、また他世帯の酒づくりを手伝うこともないが、多くの世帯からマルーラ酒を贈与されたため、自分でつくらずとも酒を飲むことができた。このような世帯は、ミルクや家畜屠殺時の肉を他世帯に贈与するのである。

また、マルーラ酒の贈与はマルーラの木を持たない世帯によっても行われた。Fさん(62歳)は夫に先立たれた寡婦であり、現金収入はほとんどない。さらに、自分の土地に果実のなるマルーラの木がなく、自分の酒をつくることはできない。しかし、彼女はマルーラ酒を飲むのが好きなため、他世帯の酒づくりに積極的に参加し、その場で未発酵の果汁を飲んでいた。また、手伝った世帯から後日酒を贈与されることもあった。そのため、マルーラの木を持たない彼女も、家に友人を招いて酒を飲むことができる。ところが、驚いたことに彼女は、他世帯から贈与された酒の一部を別の容器に移し替え、それを別の世帯に贈与したのである。その理由を聞くと、その世帯が家畜の肉やミルクをくれるためだという。この事例は、マルーラ酒が、家畜を持つ富裕世帯からの肉やミルクのお返しとして贈与されていることを示している。

## おわりに

以上のように、オヴァンボの女性たちはマルーラ酒を複数世帯の女性と共同で作り、その酒を

共飲し、贈与することを通じて村内の社会関係を維持・創出していた。このような活動は以前から続けられてきたが、現在では、家畜所有頭数の偏りにより、緩やかな互酬性に支えられた「首の骨」の関係が不安定化しつつあるなかで、マルーラ酒に肉やミルクと同程度の価値づけがなされ、「首の骨」の関係を補完する働きをしていると考えられる。また、酒づくりの過程における共同労働や緩やかな労働交換は、世帯が個別化するなかで、世帯間の社会関係を取り持つ働きを担っている。このような、マルーラ酒を介した関係は、職を持たない世帯が肉やミルクなどの副食を得る機会を増やし、最低レベルの生計維持機構として機能するとともに、時間的な余裕がない富裕世帯がマルーラ酒を入手し、日常あまり関係を持たない村内の住民とそれを共飲する機会を提供するという重要な役割を果たしている。そして何よりも、近所の友人や親戚の人と集まり、おしゃべりをしながら酒をつくり、それを親しい人に贈与することは、女性たちにとって一年の特別な楽しみなのである。

## 【参考文献】

- 杉山祐子 [2007] 「アフリカ地域研究における生業とジェンダー 中南部アフリカを中心に」(宇田川妙子・中谷文美編『ジェンダー人類学を読む 地域別・テーマ別基本文献レビュー』世界思想社) pp.144-169。  
藤岡悠一郎 [2007] 「ナミビア北部における食肉産業の展開とオヴァンボ農牧民の牧畜活動の変容 キヤトルポストの設置に注目して」(『アジア・アフリカ地域研究』第6-2号) pp.332-351。

(ふじおか・ゆういちろう/  
京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)